

“但馬牛” 今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

「江戸時代まで」

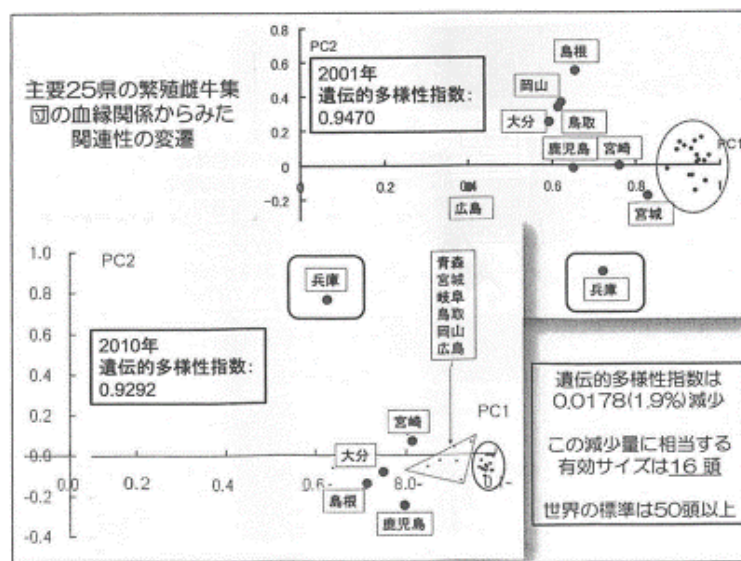
昨年12月22日、我が国初の地理的表示保護制度に但馬牛と神戸ビーフが登録されました。和牛は昔から但馬牛、丹波牛、淡路牛など、飼っている地名を付けて呼ぶ習慣があり、古来“地理的表示”してきたと言えなくもありません。

しかしこれらは在来牛の通称のようなもので、大正から昭和初期に“但馬種”や“因伯種”といった時代を経て1944年に“黒毛和種”と呼ぶようになりました。

兵庫県では“黒毛和種”となっても、“但馬種”の時代と同じく、他県の牛を交えない閉鎖育種というやり方を今日まで続けてきました。その結果、“黒毛和種”の亜種とも言うべき特殊な存在になりました。

図1は主な和牛生産県の繁殖雌牛の血統構成から県間の血縁関係を2001年と2010年で比較したものです。

図1



2012年9月 但馬牛生産者研修会 向井文雄全国和牛登録協会長講演資料より

(図1)

兵庫県以外の牛は、互いに近い血縁になっていますが、兵庫県の但馬牛は他県の牛と明らかに離れた位置にすることがわかります。これは但馬牛が“黒毛和種”の中で特異的な血統を持ち、よその牛と血縁が薄くなっていることを示しており、「黒毛和種の亜種」と表現されたわけです。このことが肉質や美味しさなど、他県の牛と違った但馬牛の特徴につながっているのかもしれない。

そこで、但馬牛改良の歴史を振り返ってみることにします。

「但馬牛 ほねほそく尖かたく かはうすく腰背まろし つの蹄ことにかたく はなのあなひろし 逸物おほし」

延慶3年(1310年)に甯直麿(ねいのなおまろ)が書いた「国牛十図」に記された但馬牛の説明です。現代語に訳すと「但馬牛は骨が細く、筋肉が引き締まっていて、皮は薄い。背中から腰にかけての移行が滑らかで、角や蹄は極めて硬く、鼻の穴は大きい。優れた牛が多い。」といったところです。

同じく鎌倉時代に書かれた「駿牛絵詞」には「山口」と「花菖蒲」という名の但馬牛が登場し、後者には「威徳寺実宝僧正牛 仙洞へめさる 勢ちいさく なりよく 心又逸物なり」と書かれているといいます。これも現代語に訳すと、「花菖蒲は威徳寺実宝僧正が所有する牛で、御所に献上される。小型ではあるが姿がよく、気質が極めて良い牛だ。」と言うことでしょうか。いずれも雄牛で、若干気性に触れていますが、外貌の特徴が書かれているだけで、何を以て良牛としたのか具体的には書かれていません。当時は貴族が乗る牛車を曳く牛として評価されたのでしょう。姿の良さや気性の良さがチェックポイントだったのかもしれ

ません。

江戸時代、大阪の天王寺は牛の流通拠点で、「大阪天王寺牛町由来記」という書物が残っています。それによると、天正年間（1573～1592年）から代々石橋孫右衛門を名乗り、天王寺牛町を仕切っていた大博労の一家があり、この家に伝わる相牛秘伝書がありました。これを要約したのが表1ですが、他に繁殖に適す年齢や交配、分娩、子牛の管理の留意点なども書かれています。（表1）

表1 石橋家相牛秘伝書要約

- 雌牛は乳の下が白く、乳細長のが良い。乳が太く短いのは乳の出が悪い。
- 種牛としては全身黒が最も良く、次に白斑が良い。それ以外は悪い。
- 種牛は“ひの弱い牛”は悪く、膚が麗しく、毛の柔らかいのが良い。
“ひの弱い牛”は膚にポロポロの米粒様のものができ、但馬牛はこの病が極めて少ない。
- 種牛は但馬の牛に限る。中でも、大城谷（現香美町小代区）、八木谷、大屋谷（以上現養父市）が最も良い。
丹波、因幡、播磨の雄牛は突き牛が多く、種牛には不適だ。
- 種牛は性質温順なのが良く、体高は3尺2寸（約97cm）程度が良い。
- 5～6産まで分娩の子牛が良い。これより産次の進んだ子牛は弱く、農事に用いるにも困難であるが、良牛は8産まで可能だ。
- 但馬国七美郡（現美方郡）大城谷、大屋、八木谷の牛は、雌雄とも良く、農耕に適している。備前、因幡の牛の農耕適性は中程度だが、智頭郡（現鳥取県八頭郡）、美濃郡は良い。丹波、播磨の牛も中程度だが、雌牛に突き牛が多い。紀伊、讃岐、小豆島および四国の牛は、農耕に不適だが、食用に向き滋養効果がある。（短脚短胴を貴ぶ）。

一方、但馬から丹後地方にかけて、菅原道真の作とする「天角地眼鼻たれて一石六斗二升八合」という歌が受け継がれてきました。

“天角”は、角が上を向いているのは角質が良く、“地眼”は前方の地面を見ていることで、性格温順、“鼻たれて”はいつも鼻鏡が濡れていることで、健康の証だとされています。

ここまではなんとか解りますが、問題は“一石六斗二升八合”で、これは“一黒陸頭耳小歯違う”と当てららしく、“一黒”は全身黒いのが一番で、“陸頭”（鹿頭とする説もある）は頭が平直で鹿に似ている、“耳小”は“じしょうきにしょう”と読み、耳が小さいこと、“歯違う”も“はちがうきはちごう”と読み、咀嚼力が強く、反芻が旺盛なことを意味し、良い牛を選ぶ方法を伝える歌だとのこと。

これらは家畜商の経験に基づき、外貌から牛の良否を判定するポイントを具体的に表したものだといえます。石橋家の秘伝書には、繁殖、農耕・使役、肉用など使用目的に応じた適性や産地による特徴も書かれており、江戸時代に牛の鑑定法が整理されていたように思われます。江戸時代の終わりには、このような鑑定法に優れた感性を持ち、良牛を造る情熱にあふれた人材が“蔓牛”を生むこととなります。

（前県立農林水産技術総合センター所長）